



(株)藤田建築設計事務所 代表取締役

藤田 茂信 様

<http://www.fujita-archi.co.jp/>



今年創立45周年を迎える(株)藤田建築設計事務所。幼稚園、保育園の園舎設計では“世界一”の実績を誇る優良企業です。その実績を裏づけるのが創業社長でもある藤田茂信氏の「乳幼児施設に向ける熱き思い」「ブルーオーシャンで輝きを放ち続ける」強さの秘訣を伺ってきました。

## 園舎の設計で世界一

自然光あふれるぬくもりのある園舎や雨の日でも遊べるという楽しいピロティ。藤田建築設計事務所が設計した、兵庫県丹波市にある「認定こども園かすが花の子園」は、2015年には兵庫県の「人間サイズのまちづくり賞・まちなみ建築部門」で知事賞、翌年2016年にはキッズデザイン協会主催の「キッズデザイン賞」とダブル受賞の園舎である。  
<http://www.fujita-archi.co.jp/topics/?id=1>

これまで多くの話題の園舎を設計してきた藤田社長だが、実は手がけた当初は「園舎は建築業界の未開部門」であったという。そんな藤田社長の園舎に対するこだわりや仕事の流儀を伺ってきた。

▶建築業界というと造形学的に形のいいものが評価を受けるイメージがありますが、私自身は「現場に即したものの、必要とされるものを作らないといけないのでは」と思っています。特に幼児教育・乳児保育の場合は、国が定めた基本的なもの以外に「園独自の教育内容」をお持ちで、それに合致したものを作らないといけません。建築家の単なる押しつけではなく「一緒に作りましょう」という気持ちです。「子供たちのために」と一生懸命働いている先生たちの夢を実現するお手伝いをしたいと思っています。

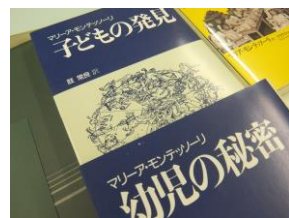
## 日本の幼児教育の歴史から学んだ

そんな先生たちの夢を形にするため、まず始めたのがヨーロッパの幼児理論を学ぶことだったという。藤田社長の書庫を拝見すると「フレーベルの教育思想やモンテッソーリの実践理論」など実に多くの専門書が並ぶ。教育施設のほとんどは外国から入ってきていて、幼稚園はなぜこういう風になってきたのかという変遷と歴史を知ることが将来を見渡す為には必須。話は「幼児教育の原点」にまで及んでいく。

▶例えばモンテッソーリのひとつの例でいうとイスの持ち方ひとつにしても「動作をひとつずつにして」音を立てずに置くという教えがあります。それを知った上で「これをやるんだったら建築はこちらの方がやりやすいだろうな」と設計も変わってくるわけです。以来「日本の幼児教育の歴史」をずいぶん勉強しています。知れば知るほど園舎に対する考え方も変わってきました。

## ゼロから一緒に夢を実現していく

▶私は講演もよく頼まれるのですが、その中で印象に残っている話があります。ある日栃木県の幼稚園の先生から電話があり、聞けばその方は20年程前に私の講演を聞いてくれていた方でした。自分の代になれば園舎の建て替えになるので、その時から「絶対にこの先生に頼もう」と決めてくれていたそうです。



その後、詳しく話を伺いに現地に行ってみると敷地は変形の土地で難しさもありましたが、周辺には木立が残りキリスト教が母体の幼稚園であったことから、ふと「星が空から降りてきたような園舎」のイメージが浮かびました。早速先生にそれを伝えると「やってみて」と大変乗り気になられ、どんどん形になっていきました。  
「認定こども園 西那須野幼稚園」

これは私のポリシーでもあるのですが「私の建てたいものを建てさせてください」ではなく「オーナーと私と一緒に作りましょう」というのずっと変わらない基本姿勢です。まず白紙の状態で行って、夢や思いをお聞きし、施主さまが持っているイメージをある程度引き出せた段階で、そこへ建築家である「自分の持っているノウハウ」をどんどん入れて作り上げていくというのが私のやり方です。

## 強さの秘密「100のチェックリスト」

藤田建築設計事務所には「そこまでやってくれるのか」と驚く独自のレベルがあり、それが、標準化され、社内でも共有されている。「100のチェックリスト」といわれるものである。

以下は同社の社内報『季刊ふぁお』からの引用であるが、気が遠くなるようなシミュレーションから生まれるチェックリストの一端が垣間見える文章である。

一人のこども・小集団のこども・大集団のこども・教職員(それぞれ男女・運転手・通勤・更衣休憩・食事)こどもの家族(両親・兄弟・4人の祖父母) 出入りの業者(教材・給食・修繕) 年間を通じた行事(運動会・発表会・入園卒園式)時の人の数と動き・大人こども・男女のトイレの距離と数と視線・送り迎えの人(子ども含む)・乗用車、給食車、消防車、救急車、スクールバスの動線こどもの脱走、変質者の侵入、非常時の全体の動き、動物(野良猫、野良犬、小鳥、カラス)それぞれの春夏秋冬、天気(雨・台風・地震)などなど動線だけ書き込んでも何十本にもなるし、園内のゾーン設定だけでも頭の中がパニックになるほどのシミュレーションを同時に考えなくてはならない

▶建物の中を職員になったつもりで歩いたり、使う人の立場にたって考え続けます。例えば4歳の子供がこれから靴をはいて運動場にでる様子を想像してください。1人の先生が1クラス30人の子供を見ているとして同時に何人靴を履けるスペースがあるのか考えます。せめて15人が2交代ぐらいで履けないと先に出た子供が心配ですね。なぜかという、先に出た子供ほどケガをする確率が高いからです。

また、0歳から5歳児の下駄箱を想像してみてください。まず靴の大きさが違います、登園時が雨なら長靴です、場所が北海道なら雪で時間がたてば水で濡れますね。そんな色々な種類、色々な状態の靴を1か所に収納する下駄箱が必要なのです。また下駄箱は靴についた砂の掃除が大変なのですが、例えば200人分の下駄箱を一人の先生が丁寧に掃除すれば、1時間50分かかります。それが例えば10分で終わると時短で現場はとても助かりますね。それができる家具(実用新案取得)もうちでは設計者が創意工夫して作っています。

今お話しした下駄箱だけでも、その他に脱臭のことや指詰めなど少なくとも1時間半はしゃべらないといけなくらい沢山のシミュレーションがあります。それがいわゆる「チェックリスト」になるわけです。

もうひとつ、なぜここまで考えないといけないのか、と思いますよね。それは子供の施設は何より「安全」でなくてはならないからです。全国で乳幼児の事故がありますが、これはすべて大人の責任。子供には何の責任もないことを肝に銘じて、ありとあらゆることを想定してシミュレーションしています。

## 藤田社長の発想力(ゼロから考える力)

▶大切にしていることがあります。それは出来あがった建物を1、2、3、5年と毎年のように検査に行くこと。「こんな不具合があったよ」と教えて頂くこともあり、“クレーム”を聞きにいつているようなところもあります。でもそれが「次に改善していくネタ」になるのです。つまり作りっぱなしにしないということです。

それから仕事をする上で常に言っているのが①出来ない理由を考えない ②自分の事として考える ということです。特に、何かあったときに「仕方なかった」と言てはいけません。

先程もいいましたが、「子供には何の責任もない、だから必死になって考えようよ」と言っています。

「これでもか」と考えたつもりでも、実はほんのわずかしか考えていないことが多いものです。私は年間通算で30日は海外に出ますが、外に出て始めて「日本の良さ」がわかったり、日本ではまだこんなことがまかり通っていたのかということを感じます。日本しか知らないと「こんなもんだ」と考えがちですが、発想力をつけるためにも海外に行って色々みてほしいですね。



### インタビューを終えて

顧客の立場から発想していく仕事の流儀。あたりまえのことのようですが、なかなか真似のできるレベルではありません。「そこまでやってくれるのか」とお客さまにいわれる緻密な仕事に強さの秘密を教えてくださいました。